

No.18
2004.3.31

いしかわの遺跡



はにわ 埴輪の複製品と出土した須恵器の壺（かほく市指江B遺跡）

ホール展 見に来てね。

本館ホールでは、発掘調査及び出土品整理で新たに発見された成果や古代体験ひろばで行われているイベントなど、県内における埋蔵文化財の最新情報を紹介しています。ただいま、古墳時代の遺跡「羽咋市大町ゴンジョガリ遺跡」^{おおまち}、「小松市千代・能美遺跡」^{せんだいのみ}の紹介及び、「学習講座 須恵器づくり」でつくった作品と遺跡から出土した須恵器を比較した展示を実施しています。

（展示期間 平成16年5月半ばまで）

〈「学習講座 須恵器づくり」は2、3ページで詳しく紹介しています。〉

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp
ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

学習講座 須恵器づくり

須恵器は、5世紀前半（古墳時代中期）に朝鮮半島から焼成技術が伝わった焼き物で、ロクロを用いて成形し、登り窯を使って焼き上げます。その後、日本各地で窯が築かれ、石川県では6世紀前半（古墳時代後期）から10世紀前半（平安時代中期）まで焼かれました。

学習講座「須恵器づくり」は、平成15年10月19日（日）と10月25日（土）の両日にロクロを使っての須恵器製作が行われ、11月14日（金）～16日（日）にかけてつくられた須恵器を復元古窯で焼きました。一週間後の11月23日（日）窯出しをしました。



製作した須恵器は食膳具に使われた「坏」と貯蔵具の「瓶」です。ロクロ台の上に粘土を置いて、回転させながら成形していきます。



完成した作品は、しばらくの間自然乾燥させます。



窯詰めです。土器の順番を確認しながら入れていきます。窯詰めには地元の中学生にも手伝ってもらいました。



窯の中は隙間のないように須恵器を置いていきます。



窯焚き開始です。
初めは窯の入り口前から焚きます。



まき
薪を少しずつ窯の中に近づけて温度を上げていきます。



温度が上昇し、窯の奥がオレンジ色になってきました。



1,000 まで上がりました。
温度を上昇させるため、オキをかき混ぜます。
防護服を着ないと窯の前に立つことができません。



酸素を遮断し一酸化炭素を発生させ、還元状態かんげんにします。そうすることによって、須恵器が青くなります。



窯焚き完了。窯出しの日までそのままにして冷まします。



窯出ししました。成功？したようです。



焼き具合をみるために順番に並べます。

平成15年度発掘調査から

新庄遺跡



調査区北側全景



調査区南側全景

^{しんじょう}新庄遺跡は鳥屋町新庄地内、^{おうち}邑知地溝帯に流れ出る二宮川の東岸上に位置します。この遺跡は、これまで昭和62年（1987）、平成13年（2001）に発掘調査を実施しており、古墳時代～中世にかけての集落遺跡を確認しています。

今年度の発掘調査範囲は、県道七尾・羽咋線をはさんで南北に分かれました。県道より北側の調査区では、古墳時代後期の溝と川の跡を確認しました。川の中から土師器が出土しました。県道より南側の調査区では、奈良～室町時代の遺構が集中していました。

奈良・平安時代では掘立柱建物跡2棟、井戸跡1基を確認しました。鎌倉・室町時代では、大きな溝で区画された中に掘立柱建物跡4棟以上、井戸跡10数基を検出しました。井戸は形状が円形と方形に分かれ、井戸枠も素掘り、木組み、石組みといろいろなタイプに分かれていました。

今回の発掘調査で様々な時代のものが明らかになりました。その中で、中世の宅地割りをもった集落の中心部の調査成果は、今後の村の景観復元に役立つでしょう。



石組みの井戸（鎌倉時代）



掘立柱建物跡（鎌倉・室町時代）

加茂遺跡



遺跡全景



弥生時代の建物群



古代の水田跡



中世の水田跡

加茂遺跡は津幡町舟橋、加茂地内の丘陵上と平地一帯にあります。遺跡はこれまでに9回発掘調査を行っており、2000年の調査では、古代のお触れ書きといわれる「加賀郡勝示札」の発見があります。このお触れ書きには人々の生活の規範が書かれており、平安時代の人々の生活をうかがい知ることができる、貴重な資料として注目されています。また冒頭には「深見村 郷駅長」と記され、加茂遺跡が古代の駅家関係の遺跡と考えられています。

今年度は平地を中心に発掘調査をし、縄文から古墳時代にかけての集落や、古代・中世の水田の跡が層をなして地中に埋まっている状態で見つかりました。

縄文時代晩期の層からは、土坑などを確認しました。遺物は少量の土器が出土しています。この調査によって周辺一帯に縄文人が生活していたことが明らかとなり、今後の調査の成果が期待されます。

調査区の西側では、弥生時代中期後半の周溝の巡る建物が5棟発見されました。周溝の中からは、土錘、石包丁などが見つかり、当時の人々の生業を考える上で貴重な資料になると考えられます。また、弥生時代後期には背後の丘陵の上に集落を移しています。この時期は、全国的に社会的緊張が高まった時代とされ、防御を意識し、丘陵上や高地に集落が移動したといわれています。加茂遺跡もまた、社会的緊張に関わったのではないかと考えられます。

古墳時代後期には、調査区北東から南西に幅2m以上の溝が流れており、南側の丘陵斜面寄りでは竪穴建物跡、堀立柱建物跡が見つかりました。

調査区の東側一帯では、古墳時代の集落の上に、古代・中世の水田がつけられるようになります。水田跡は方形をしており、古代が一辺4～6m、中世が一辺10m前後と区画が大きく変わります。

今回の調査によって加茂遺跡が駅家関係の施設であった前後の時代に、遺跡の縁辺部が水田であったことがわかりました。また古墳時代後期から古代にかけての集落の景観を復元することができ、加茂遺跡の検討を進めるうえで大きな成果になると考えられます。

平成15年度 話題の遺跡講座

平成15年11月30日(日)石川県立生涯学習センター3階大会議室において「話題の遺跡講座」が開催されました。今回は、「弥生時代の社会」をテーマに奈良女子大学大学院の広瀬和雄先生に講演していただきました。当日は約150名の方々に参加いただきました。

県内における弥生時代の遺跡

(財)石川県埋蔵文化財センター 安 英樹

石川県内における弥生時代の地域社会の特徴について、羽咋市吉崎・次場遺跡と小松市八日市地方遺跡の成果を中心に報告しました。この遺跡は弥生中期の大規模な集落の遺跡で、このような大きい集落は地域の中心地となり、弥生社会の重要な役割を果たしました。今回の報告では、両遺跡の発掘調査の成果をスライドで紹介するとともに、弥生時代における社会のシステムのモデルを示し、その後どのように変化していったかをわかりやすく説明をしました。



弥生時代の社会

奈良女子大学大学院 広瀬和雄教授

弥生時代には、「拠点集落」と呼ばれる地域の核となる集落があります。このような集落は、規模が大きく長期間にわたって営まれ、広い墓域が近くにあり、王または首長の居館が建てられ、手工業製品の製作場があるなどの特徴をもっています。愛媛県文京遺跡、大阪府池上・曾根遺跡、最近発掘調査で大型の掘立柱建物が見つかった奈良県唐古・鍵遺跡がその代表で、県内では羽咋市吉崎・次場遺跡と小松市八日市地方遺跡があげられます。拠点集落は、その性格から都市的な活動の場であったとされています。

今回の広瀬先生の講演では、全国各地の様々な集落遺跡の発掘調査の成果から、弥生都市と農村の相互関係を導きだし、そこから浮かび上がる弥生時代の社会の実態に迫っていきました。



玉の原石、未製品、製品（羽咋市吉崎・次場遺跡）



広瀬先生の講演風景

平成15年度 発掘速報会



発掘速報会風景



奈良時代の大型建物（七尾市栄町遺跡）

平成16年3月7日（日）石川県立生涯学習センター3階大会議室において「平成15年度発掘速報会 よみがえる石川の遺跡」が催されました。発掘速報会は、県内各地で実施された発掘調査から、地域や時代ごとに代表的な遺跡を取り上げ、発掘に携わった調査員がスライドなどを用いながら、最新の調査成果を紹介する公開講座です。当日は雪が降りしきる中約180名の方々に参加いただきました。

今回の講座では、縄文時代の「真脇遺跡」から江戸時代の「戸室石切丁場跡」まで、県内各地の6遺跡の報告がありました。参加者からは、「県内の新しい史実を聞くことができた。」「大変よい勉強になった。」「来年も楽しみにしたい。」などの声が寄せられ、遺跡に対する関心の高さをうかがうことができました。

	遺跡名	所在地	概要	報告
報告1	真脇遺跡	能都町	縄文時代の環状木柱列を確認	能都町教育委員会
報告2	加茂遺跡	津幡町	弥生時代の周溝をもった建物を確認	(財)石川県埋蔵文化財センター
報告3	栄町遺跡	七尾市	奈良時代の板塀で囲まれた掘立柱建物群を確認	(財)石川県埋蔵文化財センター
報告4	寺家遺跡	羽咋市	奈良時代の火を使用した祭祀跡を確認	羽咋市教育委員会
報告5	三日市A遺跡	野々市町	奈良・平安時代の官道である北陸道を確認	野々市町教育委員会
報告6	戸室石切丁場跡	金沢市	江戸時代に金沢城の石垣などに用いられた戸室石の採石跡を確認	石川県教育委員会 金沢城研究調査室

訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

国指定史跡 御経塚遺跡

御経塚遺跡は、野々市町北西部にある縄文時代後期～晩期（3,500～2,300年前）の大規模な集落遺跡です。昭和29年に地元の中学生によって発見され、これまでに数度の発掘調査が行われています。集落は、中心部に祀りに使われた広場をもち、広場の周りには、竪穴建物跡が並んでいます。最近の調査では、金沢市新保本町チカモリ遺跡で発見された巨大木柱列と同じような、円形にめぐる遺構もいくつか確認されています。

遺跡からは、1万点近くのたくさんの土器や石器が出土しました。土器は、食べ物を煮炊きするための深鉢や入れ物に使用した浅鉢などが見つかりました。

石器は、狩りの時に矢の先につけた石鏃や土掘りに使った打製石斧、ヒスイ製の玉類、御物石器や石棒をはじめとする祀りの道具など多彩なものが見つかりました。特に御物石器、石棒など祭祀遺物は1遺跡の出土量としては全国的にみても大変多く、縄文人の信仰心の厚さをうかがい知ることができます。

この遺跡は、縄文時代の生活や文化を知る上で大変貴重であることから、昭和52年に国の史跡に指定されました。現在、約15,000㎡が史跡公園として整備され、竪穴建物を復元し、縄文の集落を体感することができます。また、公園の隣には、御経塚遺跡をはじめ町内の発掘調査で出土した考古資料を展示公開している「野々市町ふるさと歴史館」が併設されています。



御経塚遺跡公園の復元住居

町指定史跡 経塚

御経塚遺跡公園から北西約300mにある御経塚墓地の横に隣接しています。経塚は、経典を永く後世に伝えるため、土の中に埋納しその上を盛土し塚状にした施設で、平安時代後半からつくられるようになります。御経塚地内の経塚は、戦国～江戸時代につくられ、地名の由来ともなっていて、県内では数少ない平地に立地しています。経塚の上には、経典を守るために祀られた傳大子と呼ばれる石仏が置かれていました。この石仏は、天保10年（1839）造立されており、現在、野々市町ふるさと歴史館で展示しています。



経塚

国指定史跡 御経塚遺跡 野々市町ふるさと歴史館

交通：JR野々市駅より徒歩10分

住所：石川郡野々市町御経塚1丁目182番地

開館時間：午前10時～午後4時（月曜日、祝日の翌日、年末年始は休館）

お問い合わせ：TEL076 - 246 - 0133